

無量寿

平成29年8月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語 26

本願寺第八代門主 蓮如上人の後は、第8子の実如上人が継がれ、第九代門主としてなられました。

実如上人は、応仁の乱後の混乱した世の中に対応するために、北陸地方の門徒を率いて各地の大名と争ったり、逆に争いを禁じたりと、苦勞が絶えない生涯でした。永正三（一五〇六）年九月に、越中国般若野で越後の長尾能景と戦い、能景を討ち取ったのも実如上人の時代です。

長尾能景は後の上杉謙信の祖父に当たります。そしてこの戦いの結果、長尾家は越後で浄土真宗を三〇年にわたって禁制することとなりました。

実如上人のお子様である円如上人は、蓮如上人が残されたお手紙から八〇通を選んで、現在私たちが拝読している『五帖御文』を纏められるなど、活躍されましたが、御門主を継がれることなく、三十一歳の若さで亡くられました。

そこで、円如上人のお子様 証如上人がわずか十歳で第一〇代の御門主となりました。

この証如上人の代に、山科本願寺が細川晴元などの

軍勢三万人に攻められて、灰燼に帰してしまつたこと、またこの当時に、林徳寺住職の先祖が証如上人にその功績を認められ、新たに寺を建立する許可をいただいたことなどは、前回の『無量寿』に記したとおりです。

山科を逃れ、大坂に移転された証如上人は、大坂の石山本願寺を新たな本山として整えられました。



石山本願寺復興模型（大阪城天守閣所蔵）

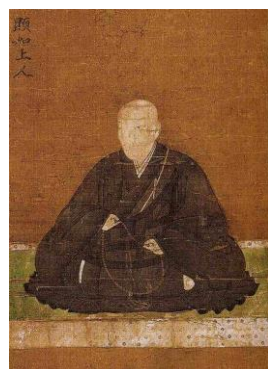
また争いを収めるため、細川晴元の養女と長男の頭如上人を婚約させ、関係修復に努められました。後に頭如上人の奥様となられた如春様は、左大臣 三条公頼公の三女で、長姉は武田信玄に嫁ぎました。このことが後々の本願寺と織田信長

との戦に大きく関わってくることとなります。

このように、安定した浄土真宗教団の運営のために、色々と尽力を重ねておられた証如上人ですが、残念ながらその道半ばで、三十九歳という若さで亡くなつてしまわれました。

その後を受け継いで天文二十三（一五五四）年に第十一代御門主となられたのは、また十二歳であつ

た頭如上人です。



頭如上人

第八代の蓮如上人が明応八（一四九九）年に亡くなられ、その五十五年後に第十一代御

門主が就任されたこととなります。一族として四代、門主として三代が五十五年間で入れ替わつたのですから、人が生きていくことさえ難しい戦国乱世において、教団の維持はどれほど大変であつたかと思われまふ。

そういう時代に於いて、急遽第十一代御門主となられた頭如上人は、婚約しておられた如春様と結婚されました。典型的な政略結婚でしたが、ご夫婦仲は非常に良かったといわれています。

また永禄二（一五五九）年には、正親町天皇から門跡寺院（皇族が住職を務める寺）と名乗ることが許可されました。現在も御門主様を「御門跡様」とお呼びすることがありますが、その始まりはここにありまふ。

このような難しい時代に、歴代の御門主やその周囲の方々が苦勞を重ねられた結果は、大きな実を結び、本願寺教団はますます発展を続けることになる状況でしたが、残念ながら時代はそのような夢を許してはくれませんでした。永禄十一（一五六八）年に、織田信長が將軍 足利義昭を奉じて上洛し、本願寺は信長の圧迫を受けるようになったのです。

林徳寺前任住職死去

林徳寺第十五代住職 徳心院釋誠慧が、平成二十八年十一月二十三日、行年八十八歳を持つて往生の素懐を遂げました。

平成二十八年十一月三〇日から十二月一日にかけて、お通夜およびお葬式を執り行いましたので、その様子を紹介いたします。

（十一月三〇日）

二十五人の護持会役員の皆様を中心に、JA新潟市葬祭センター「虹のホール」に「がた」のご協力をえて本堂内の準備を、「トリア株式会社」の協力を受けて境内の準備を整えていただきました。

役員の皆様が駐車場・受付・場内整理などの役割を分担してくださり、寒い中を



献身的にご尽力くださったこともあつて、スムーズにお通夜を勤めることができました。参拝くださった方がどれくらいおられたのかは、正確にはわかりません。本堂

に入ることができず、外でお参りくださった方も大勢おられたようです。本当にありがたいことでした。

（十一月一日）

お葬式では、多くのお寺様方による読経終了後、門徒総代 岡田秀夫氏から弔辞をいただき、出棺となりました。

関わっていただいた皆様に、あらためて

心より
お礼を
申し上げ、
報告とさ
せてい
ただき
ます。
合掌

